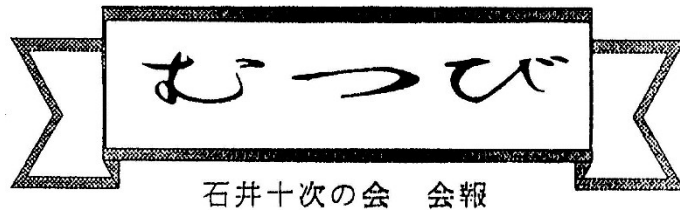


2022年
(令和4年)
3月10日



294号

日本の母「中村久子」に学ぶ

高鍋町教育長 島埜内 遵

私は「かあちゃん」、「おかあさん」、「母」、「おふくろ」ということばを聞くと胸に響く思いがあります。私は両親が願いに願って授かった子供だったので、甘えん坊で育ちました。その上、実の母は私が10歳の時、病気の手術中に亡くなったので、そのためかもしれません。

ある日(30年位前?)、テレビ番組で、「中村久子」という女性に出会いました。画面にくぎ付けになりました。「この人こそ代表的日本の母だ」と実感し、感動しました。それからというもの、「中村久子」の人となりを詳しく調べました。調べれば調べるほど、「代表的日本の母」という言葉がびったりの女性でした。

明治30年生まれ、岐阜県飛騨高山で貧しい畳職人の子供として生まれました。それこそ両親が願いに願い、結婚11年後の子供でしたのでそれはそれはかわいがられました。しかし、3歳の時突発性脱疽(足のしもやけがもとで、骨が腐り、からだの組織が壊れる)を発症。左手首、右手首、左足、右足を切断、一時失明の時期もありました。引っ越しも実に8回しています。久子の泣き声がうるさくて近所の人が眠れないという苦情のためでした。7歳の時、父死亡。極貧ゆえに母は生きるため再婚するしかありませんでした。久子は再婚先の家庭では、悪態の限りを義父や義兄弟からつかれ続ける。近所の目に入らない部屋に閉じ込められ、1日中出られない。トイレにも行けない。そんな仕打ちを受ける久子と共に母は川のほとりに立ち死ぬことも考えましたが、背中中の久子の「母様、怖いよう早く帰ろうよう。」という言葉にやっと思いとどまりました。とともに、「久子が泣いてもわめいても、何か一生食べていけるものを身に付けてやらねば。」と生鬼になって、久子を躰けることを決意、周囲からは鬼婆と言われようと何と言われようと決して妥協しませんでした。まさに「鬼母」。

久子は母の厳しい躰に対し、血のにじむような努力を重ねに重ね、縫物、編み物、炊事、洗濯、掃除が一人でできるようになっていきました。久子が「できない」というと、「言いつけたことができないければご飯は食べさせません。人間は人の役に立つために生まれてきたのです。やろうと思えばやる、やりなさい。」と決して許しませんでした。1年かけてお箸とお茶碗でご飯が食べられるようになり、さらに、実に10年以上かかって、人形の着物が縫えるようになりました。

ある時、近所の友人から、「人形を縫って」と頼まれ、日にちはかかりましたが、やっと作り上げ、唾でべとべとではあったが、プレゼントしました。友人は喜び勇んで家に持って帰り、「久子ちゃんが口で縫ってくれた人形もらった」と家族に報告したら、「そんな汚いものをもらったらいけない。」と取り上げるや否や小川に捨てられました。後日、人形を捨てられたことを聞き、「よーし、今に見ておれ、絶対いつか濡れない着物をこしらえてみせる。」という反骨心をめばえさせました。その後もできないことに次々に挑戦、濡れない着物ができるまでになんと13年もかかりました。後に「あの侮辱こそがわたしにとって一生の宝であった」と述べています。

20歳の時、生きていくために見世物小屋へ身売りし、身売りのお金は、病気の治療のための借金と困窮した生活費に当てられました。呼び名は「だるま娘」以来22年、見世物芸人として、生きていく。興行師の中には彼女を食物にする者もいました。出演回数を増やして酷使したり、売り上げを取り上げたり、怒鳴る、唾を吐きかけるなど言うに言えない扱いを受けます。

1年後その生活の苦しさの中、彼女は意気込みをこう言っています。「1年前に家を出るときは、死さえ覚悟した自分ではなかったか、生きていく道はこの社会以外どこにもないのだ。いくら厳しいといったところでまさか殺されはしない。人は与えられた苦難にどの程度まで打克っていくことができ得るものか、自分の精神力を試してみるんだ。」観客の温かい理解と同情は受けても、お賽銭式の投げ銭は一切返して受けませんでした。(後年も公的扶助は一切受けていません)賤しい見世物芸人でありながら無類の変り者。しかし、お客様には真心こめた笑顔で接すること、それが人としての信念でした。

昭和12年、三重苦のヘレンケラーが来日し、久子と対面。久子が手作りの人形を手渡しました。付き添いがヘレンケラーに久子のことを詳しく説明しました。彼女は両腕で久子をしっかりと抱き、そ

一と両手で両肩からなでおろし、袖の中の短い腕に触った途端顔色が変わり、足も義足と分かった瞬間、両眼から涙を滴らせ、「私より不幸な人、そして偉大な人」と言いました。久子にとって感動の出会いでした。晩年は講演生活が中心となり、たくさんの人々に生きる力を与えることとなりました。

私が久子から人として学んだことを挙げてみます。(久子の娘さんの講演から引用一部修正)

●「黙ってみる」

子供を育てるにあたって、何かあっても、手を貸してやることばかりが、子への優しさだ、幸せだと思っはいけない。本当の愛情というものは、涙が出るような、血の出るような悲しい思いである。してやれば直ぐ出来ること。それを黙って見ている。それが神の心であり、仏の心である。神や仏というものは、病気を治してください、幸せにしてください、金持ちにしてくださいと祈るものではありません、願うものでもありません。神や仏というものは、私たちの回りに立って見ていて下さるもの。黙って見ていて下さるのが神や仏の姿である。人間にとって一番大切なことは「黙って見ている」ということです。神様や仏さまは黙って見ていてくださる。私たち親も黙って見ている人間でありたい。

●「叱るときは叱る」

今の子供たちを見ていると、おかしいと思うことが多い。子供に何かしてやるのが当たり前。親が代わってやればいい。それは違う。本当の厳しさを教えなくては。叱ってほしい。久子は娘をよく叱りました。それは大変やんちゃで悪いから。でも娘は母に口答えをしたことがない。叱られることの嬉しさ、楽しさ、有り難さがあったから。今の子はそういうことを知らない。叱る人が悪い。母親もお婆ちゃんが叱ったりすると、母親も一緒になってそんなことで叱らないでと言います。言えば分かる。言えば分かるんならやらない方がいい。でも分からないんです。叱ってやる時はきちんと叱ってやるべき。それが大切なことだと思う。

●「親孝行」

「親に孝行尽くすこと、子たる者の常なり。いかほど才知優れたるも、親に不孝なれば、おのれが身の敬いを消され、もの知らぬ人となりぬべし。昔寒中にたけのこを得たるがごとく、親に孝なれば天その志を愛でて、雪中にたけのこを殖ましめ給う。」例え医者になろうと、どんな有名人になろうと、その人が親不孝なら何にもならない。人間の屑の屑だということ。学歴が問題ではない。もっと大事なものがあ。親孝行の出来ないような人間は駄目です。

●「悪口を言わない、疎略にしない」

久子は決して人様を疎略にしませんでしたし、人様の悪口を言いませんでした。あの体で一生懸命にやりました。そして出来るようになりました。そしてある方からは素晴らしいと言われる。反面、非常に久子は人から蔑まれました。「仏さんはいつも見てらっしゃる。いじめられてもたたかかれても決して他人様の悪口を言っはなりません」という祖母の教えを実践しました。

●「恩は着るもの」

「恩というものは着るものであって着せるものでない。」それを久子はいつも口にしていました。私たちは、人に恩を着せた時は、あの人にはこれをしてやった、あれをしてやったと偉そうなことを言っているけど、してもらったことに対しては、自分の子供や周囲に言うことは少ない。恩というものは本当に着るものであって人様に着せるものではない。今の世の中は着せる人の方が多い。あいつにこれだけのことをしてやったのに、助けてやったのに、金を借りに行ったら貸さなかったとか、いろんなことを言う人がいるが、恩は着せてはいけない。

●「あるものに感謝」

『過ぎし日のいかなる罪の報いぞや合わす掌のなき我ぞ悲しき(久子)』久子の一生の願いは合掌することでした。両手がないため合掌ができない。子供に言いました。「あなたは両手があるんだから、こちらに母さんの思い、こちらに自分の思いを込めてしっかり合掌しなさい。合掌というものはこの世で一番人間の美しい姿です。それが出来るのは人間だけです。」彼女は「あるものに感謝しなさい」とよく言いました。あなたたちは手足があるんです。一度でいい、自分の手足の見える目、聞こえる耳に本当にありがとうと言え。挨拶をしなさい。お礼を申しなさい。一日に一度ありがとうと言えなくても、人間死ぬ時になってその場で、「本当ありがとう私と生きていてくれて」って、「助けてくれて」という一言が言えたら最高です。

久子の「生い立ち」、「教え」を紹介しました。私は「中村久子」を思うたびに、十次先生の残された「屈すること勿れ、時重なればその事必ず成らん」の文言を思いうかべます。お茶碗と箸でご飯を食べられるようになるまで1年、唾でぬれない人形の着物をつくれるようになるまで13年、見世物芸人生活22年等々、久子はあらゆる困難にも決して屈しなかった、彼女の味方になったのは信じられないほどの長い長い努力の継続でした。まさに「志を持ち、実践を重ねれば事はかならず成る」です。わたくしも今後さらに、十次先生、中村久子を追いかけていきたいと思ひます。

参考文献 中村久子自伝「こころの手足」春秋社

「四肢切断・中村久子先生の一生」 黒瀬しょう次郎著 致知出版社

心に響く・幸せだと思えるワインづくり

編集委員 松下さおり

去る令和4年2月19日は、宮崎支部主催・香月克公(かつきよしただ)氏を講師としてお招きし講演会開催予定でした。しかし、コロナ感染拡大により、残念ながら講演会延期となりました。

そこで、改めまして開催に向け香月氏のご紹介をさせていただきます。人間味溢れる香月氏を知ってもらい、ワインを飲まない方も是非講演会に参加して頂ければ幸いです。

●香月克公氏(47歳)・醸造家

ニュージーランドで醸造家の資格を取得。

順調に醸造家の道を歩んでいたが、目の当たりにしたのは24時間体制で工場化されたワインの大量生産の現場。その事に疑問を感じ心が疲弊していた時に、現地の友人からドイツのワインづくりを見てくるようにアドバイスを受けた。

ドイツでのワインづくりは、家族や近隣の人々が集まって助け合いながら行っていた。儲からないけど、皆でワインを飲みながら楽しくやっている生活を見て、「心に響く・幸せだと思えるワインづくりがしたい」と思い帰国。

2013年より、宮崎県綾町にて完全無農薬でブドウ栽培をし、ワインづくりを始めた。

無農薬にこだわるのは、自然と調和した農業を続けたいと考えているから。大地の味がするワインを目指している。

一生懸命育てたワインをどう表現するかを常に考え、現在完成したのが香月氏の自信作であるオレンジワイン。いま世界的に注目されているジャンルで、香月氏のワインも人気すぎて入手困難となっている。

完全無農薬の他にもうひとつこだわっているのが、人とのコミュニティを大切にしたいワインづくりの環境。機械化すると人が必要なくなる為、非効率的ではあるがブドウ搾り等の作業もすべて人力で行う。

ワイナリーでは、大学生やシュタイナー学園の実習受け入れもしている。香月氏は、自分の海外での修行や旅をした経験を基に、若者が海外にも目を向け視野を広げ、自分のやりたいことを見つける“気づき・きっかけが与えられるワイナリーづくり”を目指している。

現在まだコロナ感染者数が多く、講演会開催日時は未定です。開催が決定しました際には、改めてご案内致します。

この状況が一日でも早く終息へ向かいますことと、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

*シュタイナーとは オーストリアやドイツで活躍した哲学者・神秘思想家・教育学者

正式名はルドルフ・シュタイナー

《おしらせ》

★新規会員のご紹介(敬称略)

【鹿児島県】小濱 健一

★ご寄付をいただきました(敬称略)

(奨学金基金へ)

【高鍋町】徳地 順子

★1/21～2/20の資料館来館者

団体・グループ		0人
個人	大人	3人
	計	3人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により、2月20日までのものとしています。

★4月号の通信発送作業

4月11日(月)9時から印刷・製本

12日(火)9時から印刷・製本

令和4年度の通信発送作業予定表を同封しました。ただし、コロナの感染状況によっては中止させていただくことがありますのでご了承ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

●「朝倉文夫記念館」見学報告～(その1)

私は、昨年11月27日に、以前から素晴らしいと評判の彫刻家「朝倉文夫記念館」を訪れました。

「朝倉文夫記念館」は、彼の故郷大分県豊後大野市朝地町の小高い山の上に静かに建っていました。館内には数々の作品が展示されていました。

記念館は2階建てでした。1階に第1展示室(明治期の作品～ゆかりの品々を展示)。15分間のビデオ上映で文夫の芸術を分かりやすく説明されました。

2階には第2展示室(大正期の作品～美しい女性像)、第3展示室(昭和期の作品～猫、犬、猿、肖像彫刻)、第4展示室(戦後期の作品～平和、希望がテーマの若者の裸像)が展示されていました。

私が学生時代に美術の三浦直政先生から「私は、朝倉文夫先生の二人の娘さん(朝倉攝、朝倉響子)の家庭教師だった。」というお話しからずっと憧憬していた二人がモデルになった「姉妹」像にも対面できました。

竹田中学校の4歳先輩だった作曲家の「滝廉太郎」の像は若くして亡くなった才能ある先輩を偲んで制作されており、美しい作品に心打たれました。

館内展示設計の欄に、長女で舞台美術家の「朝倉攝」の名前を見付け、この記念館の展示の素晴らしさに納得し、とても感動しました。(つづく)

*編集後記

むつび巻頭は、高鍋町教育長 島埜内遵様より玉稿をいただきました。ありがとうございました。
*文責 徳地順子